

『日本案内記』に見る国立公園の旅行記事に関する一考察 (1)  
 —昭和初期における観光文化研究—  
 A Study of the Travel Articles on National Parks through the  
 Consideratuin of the Travel Guide, *Nihon-Annaiki* (1)  
 —A Study of the Touristic Culture, 1929-1936—

谷沢 明  
 Akira Tanizawa

はじめに

本稿は、鉄道省『日本案内記』（全8巻）に記載された、戦前に指定された12国立公園の旅行記事を資料として、昭和初期における観光地の状況、観光の在り方を探るとともに、大正期に流行した山河を巡る旅が、国立公園を対象とする観光旅行にどのような形で収斂したかを明らかにすることを目的とする観光文化研究である。

まずは、12国立公園の指定時期と『日本案内記』（全8巻）の刊行時期の関係を示すと、〈表1〉のとおりである。

〈表1〉国立公園の指定時期と『日本案内記』発行年

国立公園の指定時期	『日本案内記』発行年
昭和6年4月 国立公園法制定	昭和4年7月 東北篇
昭和9年3月（第1次指定） 瀬戸内海、雲仙、霧島	昭和5年3月 関東篇 昭和6年2月 中部篇
昭和9年12月（第2次指定） 阿寒、大雪山、日光（尾瀬を含む）、 中部山岳、阿蘇	昭和7年3月 近畿篇・上 昭和8年3月 近畿篇・下 昭和9年3月 中国四国篇
昭和11年2月（第3次指定） 十和田、富士箱根、吉野熊野、大山	昭和10年3月 九州篇 昭和11年3月 北海道篇

〈表1〉から明らかなのは、『日本案内記』発行以前にすでに指定されていた国立公園は、雲仙、霧島、阿寒、大雪山、阿蘇の5カ所である。瀬戸内海は、指定と発行年月が同一、日光（尾瀬を含む）、中部山岳、十和田、富士箱根、吉野熊野、大山の6カ所は、『日本案内記』発行以後の指定である。しかしながら、国立公園法の制定は昭和6年4月であり、大正12年に内務省衛生局によって国立公園候補地が16カ所指名され、昭和7年に12カ所が決定した事実は、見逃すことができない。

## 1. 国立公園の記述

『日本案内記』に一項目を設けて国立公園の記述がみられるのは、阿寒、大雪山、瀬戸内海、阿蘇、雲仙、霧島の6カ所である。他の6カ所については、まだ国立公園に指定されていないものの、中部山岳、大山については、やがて国立公園に指定されるであろうということを眼中においての記述がみられる。また、十和田湖、日光、富士箱根は、国立公園の指定に直接ふれていないものの、名勝地として極めて高い価値を有する地として位置づけられた記述がなされている。吉野熊野は指定前であるが、なぜか国立公園の記述がある。<sup>1)</sup>以下、阿寒、大雪山、瀬戸内海、阿蘇、雲仙、霧島の6国立公園の記述をそれぞれ検討したい。まず、「概説」にみる記述内容の要点を整理すると〈表2〉の通りである。

〈表2〉『日本案内記』「概説」にみる国立公園の記述内容

公園名称	記述内容
阿寒 国立公園	阿寒国立公園は北海道の東北部釧路国にあり、阿寒、屈斜路二川の上流地帯を占め、阿寒、屈斜路、摩周の三湖、雌阿寒、雄阿寒、摩周、硫黄などの火山あり、阿寒湖畔、雄阿寒、雌阿寒、川湯その他の温泉あり、一帯の地殆ど千古斧鉞を入れぬ原始林を以て蔽はれ、湖沼、山岳、森林、温泉等その配置の妙を得、我が国稀有の原始境その儘の自然美を現はして居る。阿寒湖に学術上世界的に有名な毬藻を産することもこの地の誇である。
大雪山 国立公園	大雪山国立公園は北海道の略々中央部に位し、石狩、十勝の両国に跨り、全地域に亘り殆ど太古その儘の姿を保存する山岳風景地である。その山頂からの大眺観、高原地帯の御花畑、石狩川の層雲峡、忠別川の天人峡、音更川の仙翠溪などの溪谷美、然別湖の幽邃境、山腹山麓の諸温泉等、相俟つて山水行者の心を惹く力を有つて居る。
瀬戸内海 国立公園	中国地方に於て第一の景勝地は瀬戸内海で、その風景美は夙く海外にも知られ、国立公園として最初に指定せられたものの一つである。指定区域は岡山、香川、広島の三県に跨り、備讃瀬戸の沿岸を中心に、中国と四国の最接近した部分を占め、東は香川県の小豆島、西は広島県の鞆、阿伏兎に至る大小無数の島嶼を浮べた一帯の地域で、この区域内には香川県小豆島の寒霞溪、高松市外の屋島、五剣山、岡山県下津井の鷺羽山、笠岡港外の白石島、広島県鞆港の仙酔島などの景勝展望台があり、寒霞溪、鷺羽山、仙酔島は既に名勝に指定せられて居る。鷺羽山は近年漸く世に知られて来たが、その眺観の美は、第一指を折るの価値がある。
雲仙 国立公園	雲仙は島原半島に聳ゆる秀峯で、阿蘇の男性的な豪壮さに対して海洋美と眺望美を有し、初夏の躑躅、仲秋の紅葉、厳冬の霧氷、時に応じてその山肌を粧ふ。特に普賢岳よりの眺観は無比、有明海、千々岩湾は眼下に、稍離れて大村湾も見え、野母崎や五島、天草の島々絵をなして波に泛び、快晴の日には阿蘇の噴煙を望むことも出来るのである。雲仙温泉のあるところは矢岳と絹笠山との間にある爆裂火口の跡で、海拔七二七米、国立公園の中心地として栄え、夏期外人の避暑地と化することは皆人の知るところである。
阿蘇 国立公園	阿蘇は世界有数の活火山で、その中央火口丘たるいはゆる阿蘇の五岳の南北には、阿蘇谷、南郷谷の火口原があり、黒川、白川の火口瀬この両谷を流れて西方の一壁を破つて合流し、約五万人のこの火口原に安住し、更にこの平原を取巻く外輪山あり、海拔約八九百米の高さを以て蜿蜒たる長屏風を繞らし、雄大荘嚴なる景観を現はして居る。阿蘇の展望台として近年声価を

	高めた大観峯—遠見鼻に立つて阿蘇山と久住山とを左右に望見する人はこの両山の景観の大なるに驚くと共に、また相離るべからず関係にあることを知り、阿蘇国立公園に久住山を包含せられたことの原因を知ることが出来るであらう。この両山の中腹から山麓を繞りては幾多の温泉があり、またその高原放牧地に牛馬の逍遙せる光景や、初夏のつつじ、仲秋の紅葉など旅行者の心を牽くべきものが多い。
<b>霧島 国立公園</b>	霧島は我が国の輝かしき建国史の第一頁をかざる天孫降臨の壺地として南国の空に聳ゆる秀峯で、阿蘇外輪山の雄大と中岳噴火口の凄愴を缺くも、雲に聳ゆる高千穂峯と韓国岳を中心に、これを取巻く群峯を含み、雄大なる展望と、千古斧鉞を入れぬ森林美と、豊富なる温泉郷あり、花は霧島と歌はるる霧島つつじと秋の紅葉、殊に深碧の水を湛へる大浪池四辺の樹林が真紅と燃えて湖水に映る美観はたとふべきものもない景趣である。

これらの記述には、国立公園を形成する自然景観の特色が簡潔な言葉で纏められている。阿寒・大雪山の両国立公園は、いずれも「北海道特有の原始的の風景美を有し、他の国立公園とは違った異彩を放つて居る」<sup>2)</sup>との位置づけがなされている。阿寒国立公園では、「一帯の地殆ど千古斧鉞を入れぬ原始林を以て蔽はれ、湖沼、山岳、森林、温泉等その配置の妙を得、我が国稀有の原始境その儘の自然美を現はして居る」<sup>3)</sup>と、原始林の自然美が強調されている。また、大雪山国立公園においては、「全地域に亘り殆ど太古その儘の姿を保存する山岳風景地である」<sup>4)</sup>と、太古さながらの山岳風景が評価され、山岳からの大眺観、高原地帯の御花畑、河川の溪谷美、湖の幽邃境、山腹山麓の諸温泉等が相俟つて訪れる者の心を惹く、と記されている。

瀬戸内海国立公園は、「中国地方に於て第一の景勝地は瀬戸内海で、その風景美は夙く海外にも知られ、(中略)大小無数の島嶼を浮べた一帯の地域」<sup>5)</sup>と、大小無数の島々が織りなす内海の風景美を、その特徴として挙げている。

阿蘇、霧島、雲仙の三山は、九州における景勝地において第一に推すべきもの、として挙げられている。雲仙国立公園においては、「雲仙は島原半島に聳ゆる秀峯で、阿蘇の男性的な豪壮さに対して海洋美と眺望美を有し」<sup>6)</sup>と、海洋の眺望美を讃えるとともに、初夏のつつじ、仲秋の紅葉、厳冬の霧氷と、四季折々の山肌の表情の変化を挙げている。さらに夏期外人の避暑地として有名な雲仙温泉がこの国立公園の中心地にあることをも記す。

阿蘇国立公園では、「阿蘇は世界有数の活火山で、(中略)平原を取巻く外輪山あり、海拔約八九百米の高さを以て蜿蜒たる長屏風を繞らし、雄大荘厳なる景観を現はして居る」<sup>7)</sup>と、世界有数の活火山と外輪山を含めた雄大な景観が強調されている。併せて、阿蘇山・久住山両山の中腹から山麓の温泉群、高原地帯に放牧された牛馬が遊ぶ光景、初夏のつつじ、仲秋の紅葉などが旅行者の心を惹く、と記す。

霧島国立公園では、「高千穂峯と韓国岳を中心に、これを取巻く群峯を含み、雄大なる展望と、千古斧鉞を入れぬ森林美と、豊富な温泉郷あり」<sup>8)</sup>と、雄大な展望と原始的な森林美の価値が説かれている。併せて、霧島つつじと秋の紅葉の景趣もこの国立公園の魅力を引きだしている、と述べる。

次に「案内編」に取り上げられた「国立公園」の項目にみられる記述内容を整理すると〈表3〉の通りである。

〈表3〉『日本案内記』「案内編」にみる国立公園の記述内容(抄)

公園名称	記述内容
阿寒 国立公園	阿寒国立公園は釧路国川上、阿寒、足寄の三郡と北見国網走郡に跨り、面積凡そ八七三方軒を占める。他の国立公園と異なつて大湖が数箇湛へ、阿寒湖は西南部に、屈斜路湖、摩周湖は東北部にある。阿寒、屈斜路の二湖は阿寒川或は釧路川となつて流出するが、摩周湖は排水口がない。域内火山多く、雄阿寒、雌阿寒の二山は阿寒湖と共に、公園の名の基づくところである。温泉も諸処に湧出して居る。火山、湖沼、瀑布と共に、公園の自然美に欠くべからざるものは、未だ斧鉞を知らない原始林であることは云ふまでもない。
大雪山 国立公園	大雪山国立公園は昭和九年に設定された。北海道本島の略々中央部にあつて、石狩の国上川、空知二郡六箇町村、十勝国河東、川上二郡四箇町村に跨り、本道の最高点を有する大雪山のみならず、山岳スキー場として名高い十勝岳や風色に富む然別湖等を含み、面積約二、三二〇方軒を占める。その大部分は国有地及御料林に属し、一部は公有林で全然私有地を含まない。この地方は長流巨川の水源地で、湖沼には乏しいが、海拔二千米以上の山岳多く、火山に富み、峡谷と共に豪壯雄大な光景を呈し、保養に適する温泉が諸処に湧出して居る。植生は高度に依つて略々四帯となり、原始的の密林をなすところがあり、豊富な御花畑をなすところがあり、動物にも珍奇なものがある。
瀬戸内海 国立公園	東は岡山県児島半島胸上村坊主島から香川県小豆島四海村北端及同島坂手村大角崎から同県小田村馬齒岬、西は同県荘内村三崎から広島県鞆町阿伏兔岬に至る各見通線内に含む島嶼並に沿岸地域は瀬戸内海国立公園に決定した。この地域内には寒霞溪、五剣山、屋島、塩飽諸島、仙酔島、鷺羽山等の展望勝地がある。
雲仙 国立公園	この公園は明治四十四年来長崎県立雲仙公園として開発した温泉地帯を中心とし、島原半島の脊骨をなす東西雲仙火山群を抱擁し、東西約一二軒、南北約二〇軒、面積一三方軒弱の地域を以て、昭和九年三月瀬戸内海、霧島と共に、我が国最初の国立公園に指定された。園内眺望雄大、山岳、高原、溪谷、躑躅、紅葉等自然の美を有し、温泉無盡蔵に湧き出で、数多の噴気孔存し、文化的施設も備はり、一年の登山者は内外人合せて三四十万人に上ると云ふ。
阿蘇 国立公園	熊本、大分の二県に跨り、主要部は阿蘇山で、その東北にある久住山、九重山、大船山、黒岳、平治岳、三俣山、黒岩山、泉水山、獅師岳、一目山、涌蓋山等の地方を含み、西南部は大きく、東北部は小さく、これを連ねる部分は極めて狭い。この公園は湖沼の大なるものなく、海に遠い欠点はあるが、九州島の最高峯もあり、世界に名高い大噴火口もあり、諸処に温泉が湧出して幸ある将来を有つて居る。交通は西南部に便利で、東北部はこれに劣つて居る。
霧島 国立公園	鹿児島、宮崎二県に互り、鹿児島側では吉松、栗野、牧園、東襲山の四町村、宮崎側では西岳、高原、小林、飯野、加久藤の五町に跨る約一九八軒(ママ)の区域である。この内に二十二峯を算する霧島火山群があつて、完全な火口十五、火口湖八、爆裂火口八を数へ、豊富な温泉、森林美、霧島躑躅の美観、神代の史蹟等幾多の特色がある。計画中の登山道路完成の暁には、観光が便利であらう。

それぞれに共通するものは、位置をはじめとする国立公園を構成する主要地点等の地理的記述であるが、併せて国立公園としての特徴も要点をおさえて記されている。

阿寒国立公園は、阿寒湖・屈斜路湖・摩周湖の三湖、雄阿寒・雌阿寒の山岳等の紹介とともに、「火山、湖沼、瀑布とともに、公園の自然美に欠くべからざるものは、未だ斧鉞を知らない原始林である」<sup>9)</sup>と、その原始的な自然が評価されている。

大雪山国立公園は、大雪山、十勝岳、然別湖の紹介とともに、「海拔二千米以上の山岳多く、火山に富み、峡谷と共に豪壮雄大な光景を呈し、保養に適する温泉が諸処に湧出して居る」<sup>10)</sup>と、その豪壮雄大な景観と豊富な温泉を強調し、植生や動物についてもふれている。

瀬戸内海国立公園では、寒霞溪、五剣山、屋島、塩飽諸島、仙酔島、鷺羽山等の展望地の紹介がなされているものの、その特徴についての記載はみられず、記述内容は単調といった感を否めない。

雲仙国立公園においては、まず明治44年に長崎県立雲仙公園として開発された温泉地の歴史を述べ、「眺望雄大、山岳、高原、溪谷、躑躅、紅葉等自然の美を有し、温泉無盡蔵に湧き出で、数多の噴気孔存し、文化的施設も備はり」<sup>11)</sup>と、その魅力を説いている。なお、「文化的施設」とは、本文の記述からして、付近に設置されているゴルフ場・テニスコート・娯楽場・プール・大弓場等を指すもの、と考えられる。

阿蘇国立公園は、阿蘇山及び久住連山の紹介とともに、「九州島の最高峯もあり、世界に名高い大噴火口もあり、諸処に温泉が湧出」<sup>12)</sup>と、阿蘇山の大噴火口の存在を強調している。

霧島国立公園は、「霧島火山群があつて、完全な火口十五、火口湖八、爆裂火口八を数へ、豊富な温泉、森林美、霧島躑躅の美観、神代の史蹟等幾多の特色がある」<sup>13)</sup>と、火山景観とともに、史蹟すなわち高千穂の存在を特筆しており、執筆の時代背景がかすかに漂う。

## 2.案内編の項目構成

『日本案内記』は、口絵、例言に始まり、大部の「概説」の後に、鉄道沿線別の「案内編」を置く構成である。概説は、各篇により若干の差異はあるが、おおむね、位置・区域、地形・地質、気候、動植物、行政区画、風俗、方言、産業、沿革及び史蹟、神社、寺院・仏像及び仏画、学術上の施設、交通、旅行日程案となっている。その内容は、本文を含めてきわめて高水準を示しており、我が国における第一級の旅行案内書として高い評価がなされている。<sup>14)</sup>

ここで、「案内編」における12国立公園の記載項目を抽出すると、〈表4〉の通りである。

〈表4〉『日本案内記』『案内編』にみる国立公園の記載項目

公園名称	記載項目
阿寒 国立公園	阿寒国立公園、摩周湖、摩周岳、横断道路、阿寒湖畔温泉、雄阿寒温泉、阿寒湖、阿寒湖の毬藻、パンケトー・パンケトー、雌阿寒岳、雄阿寒岳、雌阿寒温泉（オンネツト湖）、硫黄山、躑躅原、川湯温泉、屈斜路湖、和琴温泉
大雪山 国立公園	大雪山国立公園、層雲峡温泉、層雲峡、大雪山、石狩岳、吹上温泉、十勝岳、十勝岳スキー場、愛山溪温泉、天人峡、松山温泉、羽衣の滝、然別湖畔温泉、夫婦山、然別湖、山田温泉、本郷温泉、仙翠峡、糠平温泉
十和田 国立公園	十和田湖奥入瀬口、葛温泉、十和田湖、子ノ口、十和田神話、湖上の遊覧、雪中行軍遭難記念碑、十和田湖八甲田越道、八甲田山、八甲田山スキー場、酸ヶ湯温泉
日光 国立公園	日光街道の杉並木、輪王寺、三仏堂、相輪櫓、東照宮、東照宮宝物館、二荒山神社、本宮神社、四本竜寺址、滝尾神社、常行堂、法華堂、慈眼堂、大猷院霊廟、日光の植物、日光植物園、含満ヶ淵、裏見滝、華厳道、華厳滝、中禅寺湖、二荒山神社中宮祠、中禅寺、日光火山群、男体山、湯ノ湖、日光湯元温泉、日光湯元温泉付近スキー場、日光白根山、鬼怒沼山、湯沢の噴泉塔、菅沼、丸沼、大尻沼、尾瀬付近、燧岳、至仏山、会津駒ヶ岳、帝釈山、田代山
富士箱根 国立公園	箱根山、箱根の諸温泉、湯本温泉、早雲寺、塔ノ沢温泉、宮ノ下温泉、底倉温泉、堂ヶ島温泉、小涌谷温泉、蘆湯温泉、二子山、硫黄山噴気孔、駒ヶ岳の炭酸孔、箱根神社、蘆湖、箱根関所址、箱根関所考古館、木賀温泉、強羅温泉、大涌谷、千石原温泉、姥子温泉、富士山、富士登山道、御殿場口、須走口、富士山の頂上、影富士、富士登山大宮口、白糸滝、音止滝、三里ヶ原、富士浅間神社、吉田口富士登山道、諏訪の森、つつじが原、雁の穴、富士五湖、山中湖、河口湖、西湖、青木ヶ原、蝙蝠孔、紅葉台、熔岩樹型、精進湖、精進口富士登山路、御中道巡り、本栖湖、富士山麓スキー・スケート場
中部山岳 国立公園	平湯温泉、白骨温泉、乗鞍岳、上高地温泉、上高地溪谷、上高地付近の地質、上高地付近の植物、焼岳、穂高岳、槍ヶ岳、有明温泉、中房温泉、中房温泉の膠状硅酸及硅華、燕岳及常念岳、葛温泉、針ノ木岳・蓮華岳・鹿島鎗岳・烏帽子岳方面、白馬岳、白馬連山高山植物帯、立山温泉、立山、剣岳、黒部溪谷の諸温泉、黒部溪谷
吉野熊野 国立公園	吉野山、吉野山の桜、吉野神宮、村上義光墓、御野立所、大橋、黒門、銅鳥居、金峰山寺、吉野朝皇居址、吉水神社、吉野温泉、如意輪寺、後醍醐天皇塔尾御陵、山口神社、大日寺五智如来坐像、桜本坊、竹林院、村上義隆墓、吉水院宗信墓、吉野水分神社、金峰神社、吉野林業、大峰山脈と大台ヶ原、勝浦町、勝浦付近の温泉、紀の松島、湯川温泉、那智滝、花山法皇御籠所址、飛滝神社、亀山院御卒都婆建設址、青岸渡寺（那智観音）、熊野那智神社、那智山原始林、妙法山阿弥陀寺、那智浦海水浴場、佐野の松原、新宮町、徐福の墓、阿須賀神社、浮島の森、熊野速玉神社、神倉山、丹鶴城址、熊野川、九里峡、瀨峡、川湯温泉、熊野坐神社、湯峯温泉、ゆのみねしだ自生地
大山 国立公園	大神山神社、大山寺、大山、大山きゃらぼく純林、大山牛馬市、蒜山スキー場



瀬戸内海 国立公園	鷲羽山、瀬戸内海、瀬戸内海国立公園、高島行宮址、白石公園、真鍋島、鞆町、安国寺、沼名前神社、鞆公園、対潮楼、鞆の浦海水浴場、阿伏兎岬、燧洋の鯛網、女木島、屋島、屋島神社、屋島寺、獅子の霊巖、談古嶺、遊鶴亭、八栗寺、小豆島、神懸山（寒霞溪）
雲仙 国立公園	雲仙国立公園、雲仙温泉、雲仙ゴルフコース、雲仙岳、原生沼沼野植物群落、地獄地帯しろどうだん群落、池の原みやまきりしま群落、野岳いぬつげ群落、普賢岳紅葉樹林、諏訪の池
阿蘇 国立公園	戸下温泉、栃木温泉、垂玉温泉、地獄温泉、数鹿流滝、火山研究所、湯の谷温泉、内牧城址、内牧温泉、遠見ヶ鼻（大観峯）、西巖殿寺、阿蘇国立公園、阿蘇の火口、阿蘇山、根子岳、阿蘇神社、中通村古墳群、手野の大杉、久住山諸温泉、久住山
霧島 国立公園	霧島国立公園、霧島温泉、霧島山、海棠自生地、栗野岳温泉、霧島神宮、神宮温泉、挾野神社、挾野の杉並木、挾野神社仏法僧蕃殖地

さらに、12 国立公園の記述項目を、便宜的に山岳・瀑布・湖沼・溪流峡谷・温泉・社寺史蹟・植物・スキー場・その他に分類し、記述内容を考慮しつつその件数を数えると〈表5〉の通りである。なお、この件数については、項目名が必ずしも分類名と一致しておらず、記述内容を勘案した上でのカウントであり、あくまでも傾向を知るための目安に過ぎない。

〈表5〉『日本案内記』「案内編」にみる国立公園の記載項目件数

公園名称	山岳	瀑布	湖沼	溪流 峡谷	温泉	社寺 史蹟	植物	スキー 場	その他	計
阿寒	4	-	4	-	5	-	1	-	3	17
大雪山	4	1	1	3	8	-	-	1	1	19
十和田	1	-	2	1	2	-	-	1	4	11
日光	9	2	5	1	2	14	2	1	4	40
富士箱根	15	2	7	-	12	4	-	1	9	50
中部山岳	9	-	-	2	8	-	2	-	2	23
吉野熊野	3	1	-	3	5	29	5	-	6	52
大山	1	-	-	-	-	2	1	1	1	6
瀬戸内海	2	-	-	-	-	7	-	-	15	24
雲仙	1	-	1	-	1	-	5	-	2	10
阿蘇	5	1	-	-	7	4	1	-	2	20
霧島	1	-	-	-	3	2	2	-	2	10
計	55	7	20	10	53	62	19	5	51	282

〈表5〉から気づくことは、12 国立公園それぞれの性格の共通性と差異である。まず、記述項目数の多い国立公園を挙げると、吉野熊野・富士箱根・日光の三国立公園である。この三国立公園に共通することは、東京・大阪の大都市に近く、観光地的性格を早い時期から備えたという点である。たとえば、吉野熊野国立公園の「吉野山」の記述に、「昔なが

ら来る春毎に満山を粧ふ桜花と、幾多の南朝史蹟とは観光者を惹き付けて居る」<sup>15)</sup>、同「大峯山脈と大台ヶ原」の記述に、「近年交通至便となり、京阪地方から週末旅行に適するのと、山岳及森林、溪谷景観の非凡なることにより、国立公園として指定されて以来登山客が激増して居る」<sup>16)</sup>と、自然・史蹟・山岳・森林・溪谷美により関西からの観光客を惹きつけていることが記されている。また、日光国立公園・富士箱根国立公園の「概説」の記述に、「関東地方には名勝地、遊覧地が多い。中でも東の日光は東照宮及輪王寺の殿堂楼閣の人工美と、森林、峯巒、瀑布、湖沼、溪流、叢原、温泉などの自然美と相俟ち、西の箱根は偉大なる二重式火山によつて構成せられたるその自然美と、景勝の地を占めて散在する十一箇所の温泉場の設備と相俟つて、帝都を中心とせるこの地方名勝の東西両大関とも称すべきものである」<sup>17)</sup>とあり、人工美・自然美・温泉などの資源を有する東京付近の名だたる名勝・遊覧地であることを記している。また、これら三国立公園の記載項目はいずれも多岐にわたることを特徴とし、自然景観と歴史・文化的景観の織りなす多様な資源を有することを共通点として挙げることができる。とりわけ日光国立公園と吉野熊野国立公園においては社寺・史蹟の記載項目が飛び抜けて多く、また富士箱根国立公園では温泉の記載項目が多いことが、これらの国立公園の特徴・性格を物語っている。

記載項目は、数の上では社寺・史蹟が最も多いが、山岳・温泉がこれに次ぐ。山岳は12国立公園すべてにおいて記載項目があり、温泉は大山・瀬戸内海を除いた10国立公園において記載項目が設けられている。すなわち、火山国日本の景観が戦前に指定された国立公園の特徴になっている、と捉えることができる。具体例を述べると、北海道の阿寒国立公園は阿寒・屈斜路・摩周の三つのカルデラ地形を基盤としている。大雪山国立公園は、大雪火山群・十勝火山群・然別火山群など複数の山群から構成されている。東北の十和田国立公園は、カルデラ湖である十和田湖とこの湖から流れ出す奥入瀬溪流が核である。関東の日光国立公園は、男体山と、その噴火によって堰止湖となった中禅寺湖の景観に特色づけられる。また、富士箱根国立公園は、富士山はもとより、富士山の火山活動によって生じた富士五湖、および箱根火山群と堰止湖の芦ノ湖、温泉群が主要な構成要素になっている。さらに、中部山岳国立公園は北アルプスすなわち飛騨山脈主要部を区域とする山岳地帯であるが、活火山焼岳や立山カルデラなどの火山地形が含まれている。大山国立公園は、溶岩円頂丘の火山として形成された大山が中心である。九州の雲仙国立公園は活火山普賢岳と噴気・噴湯活動が活発な雲仙温泉、阿蘇国立公園は活火山阿蘇山と阿蘇カルデラ、霧島国立公園は霧島火山群がその基盤を成している。

このように記載項目の在り方を検討することにより、戦前に指定された国立公園の共通性と差異を読み取ることができるのである。

### 3. 旅行日程案と交通状況

#### (1) 概要

『日本案内記』の「概説」には、それぞれ「旅行日程案」が掲載されている（但し近畿篇は付録に掲載、中国四国篇には記載なし）。いわゆる、モデルコースである。さて、大正14年、鉄道省は国内景勝地巡り旅行に利便を提供して探勝旅客を誘致し、隠れた風光地の



開発を計るとともに、国民の健康増進に資するために「クーポン式遊覧券」の発売を開始する。それは、民衆の周遊旅行、観光旅行が盛んになった時代を象徴する出来事として捉えてよいであろう。鉄道省は、大正期に数々の旅行案内書を発行し<sup>18)</sup>、その集大成として『日本案内記』の刊行に至るが、同書掲載の旅行日程案は、探勝旅客の誘致を目的として練られたことは間違いないであろう。しかしながら、旅行日程案は、大まかなものから詳細なものまで、各篇によりばらつきがみられる。各篇に掲載された旅行日程案のタイトル一覧を示すと、〈表6〉の通りである。

〈表6〉『日本案内記』にみる「旅行日程案」のタイトル

日本案内記	旅行日程案の概要
北海道篇	五日間一巡日程、一週間一巡日程、十日間一巡日程
東北篇	松島花巻廻覧(三日間)、松島金華山廻覧(三日間)、会津廻覧(三日間)、会津湯海鳴子廻覧(五日間)、十和田湖廻覧(其一)(三日間)、十和田湖廻覧(其二)(三日間)、田沢湖廻覧(二日間)、男鹿半島廻覧(二日間)、東北地方廻覧(其一)(九日間)、東北地方廻覧(其二)(七日間)、東北地方廻覧(其三)(七日間)、磐梯山登山会津若松東山温泉廻覧(二日間)、吾妻山登山(三日間)、霊山登山(三日間)、蔵王山登山山寺廻覧(四日間)、岩手山登山(三日間)、八甲田山越(四日間)、出羽三山登山(四日間)、鳥海山登山(三日間)、岩木山登山(三日間)
関東篇	三浦半島めぐり(二日間)、箱根温泉めぐり(二日間)、豆相温泉めぐり(三日間及五日間)、大島行(二日間)、南伊豆めぐり(五日間)、身延詣で(二日間)、三保久能廻遊(二日間)、奥多摩へ(二日間)、富士登山(二日間)、富士の裾野めぐり(三日間)、大菩薩嶺登山(二日間)、増富昇仙峽めぐり(三日間)、秩父連峯登山(五日間)、浅間山登山(二日間)、赤城山登山(二日間)、伊香保行(二日間)、上毛温泉めぐり(三日間)、尾瀬沼探勝及燧岳登山(四日間)、日光見物(三日間)、男体山登山(二日間)、白根山登山(二日間)、日光から奥上州へ(二日間)、塩原温泉めぐり(二日間)、塩原から奥鬼怒溪谷へ(三日間)、高原山登山(二日間)、那須温泉めぐり(二日間)、那須岳登山(二日間)、水戸及三浜めぐり(二日間)、香取鹿島めぐり(二日間)、香取鹿島銚子めぐり(三日間)、房総一周(二日間及三日間)
中部篇	浜名湖めぐり(二日間)、渥美半島めぐり(二日間)、知多半島めぐり(二日間)、木曾川下りと長良川鶴飼見物(二日間)、伊勢参り(二日間)、飛騨入り(三日間)、南アルプス鳳凰白峯三山登山(五日間)、南アルプス甲斐駒ヶ岳仙丈ヶ岳登山(四日間)、八ヶ岳山麓の温泉めぐり(二日間)、八ヶ岳登山(三日間)、南アルプス赤石岳登山(五日間)、天竜川下り(二日間)、北アルプス上高地槍ヶ岳燕岳縦走(四日間)、日本北アルプス白馬岳登山(三日間)、木曾路探勝(二日間)、御嶽登山(二日間)、永平寺詣で(二日間)、北陸温泉めぐり(二日間)、白山登山(二日間)、能登半島めぐり(三日間)、北アルプス立山登山アルプス横断(五日間)、黒部溪谷探勝(四日間)、上田付近の温泉行(二日間)、菅平スキー場行、平穏温泉めぐり(二日間)、志賀高原スキー場行(二日間)、妙高山麓スキー場行、新潟から佐渡へ(三日間)

近畿篇	[近畿篇上]京都見物(一日案)、京都見物(二日案)、京都見物(三日案)、琵琶湖遊覧、比叡山詣で、保津川下りと嵐山遊覧、天橋立城崎遊覧(二日間)。 [近畿篇下]大峰山登山二日間、大台ヶ原山登山二日間、大峰山脈縦走及大台ヶ原山登山六日間、南紀巡り(田辺起点)三日間
中国四国篇	〈記載なし〉
九州篇	一週間九州一周(門司起点)、二週間九州一周(門司起点)、

\*但し、ゴシック体は戦前に指定された12国立公園関連のもの

〈表6〉を見てわかることは、「北海道篇」「九州篇」は、わずか二、三の周遊コースが組まれているに過ぎないのに対し、「東北篇」「関東篇」「中部篇」は、短期間の多様なモデルコースが組まれているという違いである。また、「近畿篇」は、「関東篇」に比べてモデルコース数が少なく、「中国四国篇」には、旅行日程案の記載がみられないという点が指摘できる。これらの差異が生じた理由の一つは、首都圏・近畿圏からの旅行者を念頭においてモデルコースを組んだため、「北海道篇」「九州篇」は、ごく大まかな周遊コースにとどまり、「関東篇」「中部篇」は、短期間の小旅行を含めた多様なモデルコースが組まれているのではないかと考えられる。しかし、それだけでは、「関東篇」と「近畿篇」のモデルコースの多様性の在り方の違いが説明できない。もう一つの理由は、昭和4年から11年にかけての7年間にわたって刊行された『日本案内記』の編集方針の時代差によるものではないかと考えられる。すなわち、刊行年が早い「東北篇」「関東篇」「中部篇」が多様なモデルコースを組んでいるのに対し、昭和7年刊行の「近畿篇」以降、省略化される傾向が指摘できる。しかし、その理由は定かでない。

## (2)阿寒国立公園・大雪山国立公園

次に、戦前に指定された12国立公園が「旅行日程案」の中でどのような扱いになっているのかを見ていきたい。「北海道篇」の「旅行日程案」として、五日間、一週間、十日間の三つの「一巡日程」が出ている。「一週間」「十日間」の日程案に層雲峡が、「十日間」に層雲峡および阿寒湖が取り上げられている。ここで、「十日間一巡日程」を示すと〈表7〉のとおりである。ここでは、国立公園エリアの旅行先として、層雲峡峡谷、層雲峡温泉、阿寒湖、弟子屈温泉、摩周湖、川湯温泉、屈斜路湖が選ばれている。

阿寒国立公園への交通状況については、「この両方面(釧路、北見地方)の連絡には舌辛から阿寒湖を経て北見相生駅に通ずる。相生、阿寒湖畔間は夏季観光客多く、その間に遊覧バスが通ずる。弟子屈から川湯温泉、和琴温泉を経て美幌峠の壮観を味ひ美幌に通ずる自動車道路も夏季観光客が多い。阿寒から弟子屈へは横断自動車道路がある」<sup>19)</sup>と記され、夏季観光客が多いことが指摘されている。ただし、この横断道路については、「阿寒カルデラと屈斜路カルデラを繋ぐ横断道路に自動車路線が無いので、釧路市、野付牛町または網走本線足寄駅より貸切自動車に頼つて、全コースを廻遊する方法が行はれて居る」<sup>20)</sup>ともあり、川湯地区と阿寒地区の連絡が良くなかった状況をうかがい知ることができる。

大雪山国立公園へは、探勝の主な四つの門口について、「北口は層雲峡温泉、西北口は松

山温泉で、何れも大雪山登山に、西口は吹上温泉で、十勝及付近の登山に、南口は然別温泉で、然別湖遊覧に対するもの<sup>21)</sup>と述べている。大雪山連峰への登山路は、層雲峡温泉、松山温泉、愛山溪温泉の三つがあった。当時最も多く利用されていたのが層雲峡口であり<sup>22)</sup>、「層雲峡から登って黒岳小屋に一泊し、翌日旭岳に登って松山温泉へ降るか、または松山温泉から旭岳に登り黒岳小屋へ一泊して層雲峡へ降るのは最も一般的なコースの一つである<sup>23)</sup>と記されている。なお、現在、層雲峡温泉から黒岳七合目まではロープウェイおよびリフトが、大雪山連峰の最高峰である旭岳にも山麓の旭岳温泉からロープウェイが通じ、国立公園の探勝が便利になっている。当時は、層雲峡温泉から黒岳まで7キロメートル、約4~5時間かけての登山コースであった。

〈表7〉『日本案内記』「北海道篇」にみる「十日間一巡日程」

第一日	函館付近を見て洞爺湖に至り一泊。
第二日	洞爺湖から室蘭に入り、更に進んで登別温泉で一泊。
第三日	登別から白老土人部落、苫小牧を見て旭川に至り一泊。
第四日	旭川から層雲峡に入り峡谷を探勝して同温泉に一泊。
第五日	層雲峡から上川に出で野付牛に至り一泊。
第六日	野付牛から北見相生に至り阿寒湖を見て阿寒また弟子屈温泉一泊。
第七日	弟子屈から摩周湖に往復し、川湯温泉、屈斜路湖、美幌峠を見て引返して川湯温泉一泊。
第八日	川湯から釧路、帯広を見て札幌に向ひ車中泊。
第九日	札幌市内を見て定山溪に至り一泊。
第十日	定山溪から小樽を経て函館へ。

\*但し、ゴシック体は大雪山国立公園・阿寒国立公園関連のもの

### (3) 十和田国立公園

「東北篇」の「旅行日程案」を見ていきたい。モデルコースとして多様な20案が掲載されている。20案の内訳は、東北地方廻覧3、地域別の廻覧8、登山（登山及び廻覧を含む）9である。東北地方廻覧のうち二つには十和田湖と奥入瀬が、一つに十和田湖が含まれている。地域別の廻覧には二つの「十和田湖廻覧」があり、登山等のうち一つに「八甲田山越」がある。このうち、二つの「十和田湖廻覧」・「八甲田山越」を示すと〈表8〉のとおりである。「十和田湖廻覧」（其一）は、東北本線古間木から十和田鉄道や乗合自動車を利用して奥入瀬川の溪谷を遡り、十和田湖畔の子ノ口に至り湖上遊覧を楽しみ湖畔に宿泊。翌日以降は乗合自動車で大湯温泉、毛馬内に至り、毛馬内から秋田鉄道で大館まで行き、そこから東京に戻るといったコースである。「十和田湖廻覧」（其二）は、逆コースであるが、蔦温泉一泊という違いがある。ちなみに蔦温泉は、十和田国立公園制定に尽力した大町桂月（高知県出身）ゆかりの一軒宿がある温泉地である。なお、十和田湖へは、奥入瀬口、三戸口、毛馬内口、小坂口、黒石口、八甲田越道の六つの到達路があり、奥入瀬口、毛馬内口が遊覧者の表口、裏口をなしていた。<sup>24)</sup>

## 〈表8〉『日本案内記』『東北篇』にみる「十和田湖廻覧」・「八甲田山越」

## 〔十和田湖廻覧〕(其一)三日間(六月から十月まで)

前夜 東北本線青森行列車で東京出発。

第一日 古間木で下車、十和田鉄道または乗合自動車により三本木に至り、更に乗合自動車で奥入瀬川の溪谷を遡り、十和田湖畔の子ノロに至る、それより船で湖上遊覧、湖畔宿泊。

第二日 湖畔遊覧、生出(和井内ホテル所在地)から乗合自動車で大湯温泉に至り宿泊。

第三日 大湯温泉出発、乗合自動車で毛馬内に至り、秋田鉄道で大館に出で上野行列車に乗換。

翌朝 東京駅帰着。

## 〔十和田湖廻覧〕(其二)三日間(六月から十月まで)

前夜 秋田廻り青森行列車で東京出。

第一日 大館で秋田鉄道に乗換へ、毛馬内下車、乗合自動車で大湯温泉に至り宿泊。

第二日 大湯温泉から乗合自動車で十和田湖畔の生出(和井内ホテル所在地)に至る、それより船で湖上遊覧、子ノロで下船、更に乗合自動車で奥入瀬川の溪流を下り、焼山から徒歩葛温泉に至り宿泊。

第三日 焼山に引返し、乗合自動車で三本木に出で、十和田鉄道または乗合自動車で古間木に至り、上野行列車に乗る。

翌朝 東京帰着。

## 〔八甲田山越〕四日間

前夜 青森行列車で東京出発。

第一日 古間木で下車、十和田鉄道または乗合自動車で三本木に至り、更に乗合自動車で焼山まで行く。それから徒歩葛温泉宿泊。

第二日 八甲田山の大岳に登山、酸ヶ湯に下り宿泊。

第三日 酸ヶ湯から横内に至り、乗合自動車で青森に出で、汽車に乗り、浅虫下車、宿泊。

第四日 上野行列車に乗る。

翌朝 東京帰着

「八甲田山越」は、奥入瀬溪流の入口である焼山まで乗合自動車を利用し、そこから徒歩で葛温泉まで行き一泊。翌日、八甲田山大岳に登り、一軒宿の秘湯として知られる酸ヶ湯で一泊。三日目に酸ヶ湯から横内まで歩き、横内から乗合自動車で青森に出で帰宅するコースである。青森・焼山間の八甲田越道については、「青森市から八甲田山中の酸ヶ湯を経て葛温泉に出で、焼山にて奥入瀬口に合し湖畔の子ノロに通ずる六二軒の山路。青森市から横内まで六軒は自動車の便がある。それより酸ヶ湯まで二四軒は駄馬、酸ヶ湯から葛温泉を経て焼山まで一八軒は徒歩」<sup>25)</sup>と記されており、八甲田、酸ヶ湯、葛温泉とも、いたって辺鄙な地であったことをうかがい知ることができる。

なお、東北地方において、鉄道駅を拠点とする陸路の自動車交通網が形づくられ、観光に利用されはじめたのは大正時代以降のことである。それは、次の記述「鉄道に次ぐ陸上交通の機関は自動車で、これを旅客用貨物用に供した始は大正二年盛岡、宮古間一〇九軒(六七哩)の営業であつた。その後、十年を経て自動車運輸の価値が認められるやうになり、爾来次第に各地に行はれて居る。(中略)現今旅客用自動車は各鉄道駅を起点とし、駅

所在の市中及付近の町村、名勝、史蹟、温泉など短距離の地に至るもの甚だ多く…」<sup>26)</sup>がその状況を物語っている。

#### (4) 日光国立公園

「関東篇」の「旅行日程案」を見ていきたい。モデルコースとして多様な31案が掲載されている。このうち日光国立公園のモデルコースを示すと〈表9〉のとおりである。東京を起点として、日光へは1泊2日、あるいは2泊3日、尾瀬沼へは3泊4日の小旅行のコースである。「日光見物三日間」では、東照宮・二荒山神社・輪王寺・大猷院廟を参拝して、霧降滝を見学。翌日は中禅寺湖に遊び華厳滝を見て、戦場ヶ原を経て湯元温泉に宿泊。三日目に東京に戻るというコースである。これは、現在も受け継がれている日光巡りの代表的な観光旅行コースでもある。

当時、上野より日光まで直通列車が一日7回走っていて、所要時間4時間であった。また、昭和4年には東武鉄道の日光駅が開業し、浅草・日光間を2時間半で結ぶこととなった。日光停車場前から「いろは坂」登り口である中禅寺口(馬返)まで日光電気軌道<sup>27)</sup>(9.4km)が敷設され(大正2年)、馬返、中禅寺、湯元行等の乗合自動車もあった。<sup>28)</sup>なお、「関東篇」刊行直後の昭和7年に日光電気軌道の終点馬返から明智平に至るケーブルカー、翌8年には明智平展望台にロープウェイが架設されて観光に供するようになったことを付記する。

「男体山登山」「白根山登山」は、登山コースである。また、「日光から奥上州へ」は、湯元温泉から徒歩で金精峠<sup>29)</sup>を越えて菅沼、丸沼を見学し、丸沼から自動車で沼田に出て東京に戻るコースである。「男体山登山」の登路は四つあり、中禅寺から登るのが最も便利で、登山者の九割はこの登路によった。男体山へは、「中禅寺湖畔の二荒山神社中宮祠から頂上まで約八軒二時間乃至三時間を要する。先ず社務所へ祈祷料として一人金五十銭を納め、社殿に参拝すると、登山路の門を開けて呉れる。道は頂上へ殆んど直線的で相当急に感ずる」<sup>30)</sup>と、祈祷料を納めて登山する風習が記されているが、登拝料を納めることは今日も変わっていない。「白根山登山」については、「登山路は東北は湯元温泉から、西北は上州片品方面からの二途あるが主に湯元から登る。湯元から白根山頂まで約八軒で、三時間乃至四時間で登られる」<sup>31)</sup>とあり、当時は湯元温泉が中心的な登山基地であった。今日では片品方面の丸沼高原から日光白根山ロープウェイが山麓まで架設され、利便性を増している。

「尾瀬沼探勝及燧岳登山」は、沼田から自動車で鎌田まで行き、鎌田から徒歩で戸倉に行き一泊。翌日は戸倉から三平峠を越えて尾瀬沼の長蔵小屋に宿泊。三日目は燧岳に登って尾瀬ヶ原を経て至仏山山麓の山の鼻小屋に宿泊。四日目に鳩待峠を経て戸倉に下り、鎌田に出て自動車で沼田まで帰るという長距離を歩く行程であった。現在は戸倉から鳩待峠まで、沼田から大清水までバスが通じている。そのため、関東方面からの尾瀬探勝では、鳩待峠から山の鼻を経て尾瀬ヶ原を歩くコースや大清水から三平峠を越えて尾瀬沼に至るコースが一般的になっている。なお、尾瀬は、平成19年に日光国立公園から分離独立して、尾瀬国立公園になった。

〈表9〉『日本案内記』「関東篇」にみる日光国立公園関係の旅行日程案

<p><b>日光見物 三日間</b></p> <p>第一日 上野発日光行列車で日光に至り、東照宮、二荒山神社、輪王寺、大猷院廟参拝の上、霧降滝を見て引返し日光町泊。</p> <p>第二日 自動車または電車で中禅寺口まで、それより自動車または徒歩中禅寺湖畔に至り、華厳滝を見、中禅寺湖に遊び、自動車で戦場ヶ原を経て湯ノ湖畔の湯元温泉に至り宿泊。</p> <p>第三日 湯元付近の諸勝を探り、自動車にて中禅寺、中禅寺口を経て日光駅に出て上野行き列車で帰着。</p>
<p><b>男体山登山 二日間</b></p> <p>第一日 日光行列車で上野発、日光駅から自動車の中禅寺湖畔に至り宿泊。日光駅から中禅寺口（旧馬返し）までは電車の便もある。</p> <p>第二日 男体山登山、引返し中禅寺湖畔から自動車日光駅に出て上野行列車で帰着。</p>
<p><b>白根山登山 二日間</b></p> <p>第一日 日光行列車で上野発、日光駅から自動車湯元温泉に至り宿泊。</p> <p>第二日 白根山登山、引返し湯元温泉から自動車日光駅に至り上野行列車で帰着。</p>
<p><b>日光から奥上州へ 二日間</b></p> <p>第一日 上野発日光行列車で日光着、適宜電車または自動車を利用。社寺参拝、華厳滝、中禅寺湖賞遊の上湯元温泉に至り宿泊。</p> <p>第二日 湯元発徒歩金精峠を越えて菅沼、丸沼、大尻沼を見、丸沼より自動車途中追貝の吹割滝を見て上越南線沼田に出で上野行列車で帰着。</p>
<p><b>尾瀬沼探勝及燧岳登山 四日間</b></p> <p>第一日 上越南線水上行列車で上野発、沼田駅下車自動車鎌田に至り、徒歩戸倉に至り宿泊。</p> <p>第二日 戸倉発徒歩三平峠を経て尾瀬沼長蔵小屋に至り宿泊。</p> <p>第三日 燧岳登山、引返し沼尻平に下り尾瀬ヶ原を経て至仏山麓、山の鼻小屋泊。</p> <p>第四日 鳩待峠を経て戸倉に下り、鎌田に出て自動車に依り沼田に至り、上野行列車で帰着。</p>

### (5) 富士箱根国立公園

富士箱根国立公園のモデルコースを示すと〈表10〉のとおりである。いずれも東京を起点とする1泊2日または2泊3日の小旅行のコースである。「箱根温泉めぐり」は、小田原から電車または自動車箱根に行き、強羅遊園、大涌谷、芦ノ湖、箱根関址、箱根権現、千条ノ滝などを巡り、箱根の温泉に一泊。翌日は長尾峠か乙女峠で富士山を仰ぎ見て帰京するコースである。これもまた前述した「日光見物三日間」と同様、古典的な観光旅行コースといえる。

箱根の交通については「遊覧地としての箱根が人を牽く力はその交通の便もあづかつて居る。即ち小田原から湯本、塔ノ沢、宮ノ下、小涌谷を経て強羅まで登山電車があり、強羅から早雲山まではケーブルがあり、早雲山から大涌谷、姥子を経て湖尻までは駕籠の便があり、湖尻と箱根町、元箱根の間には遊覧汽船が走つて居る」<sup>32)</sup>と記され、遊覧地として人気が高いのは交通の便がよいことが指摘されている。ここで、興を覚えるのは、早雲山から大涌谷を経て湖尻まで「駕籠」があったという記述である。この経路には、現在、箱



根ロープウェイが架設されている。箱根への交通の便が整えられたのは、東海道本線・御殿場線経路の開業前年の明治 21 年、小田原馬車鉄道<sup>33)</sup>が国府津から小田原経由で箱根湯本まで開業してからのことであり、大正 8 年には箱根湯本・強羅間の鉄道線が開業した。

さらに、大正 9 年、熱海線（国府津・熱海間）が開業して東京から小田原に直接列車が乗り入れ、箱根がより身近な観光地になっていった。併せて自動車交通の便も発達し、「自動車は小田原から湯本、塔ノ沢、宮ノ下、小涌谷、蘆湯、元箱根を経て箱根町に至り、箱根町からは更に山中宿を経て三島町、沼津方面に出られ、宮ノ下からは別に木賀、千石を経て長尾峠を越えて御殿場に出られる。その千石からは別に湖尻への路線もあり、箱根の遊覧跋涉には殆ど足を労するを要せぬ程の便利さとなつて居る」<sup>34)</sup>と、ほとんど歩かずに乗物をつかって遊覧できる利便性がうたわれている。

「富士登山」は、富士吉田口から登り、御殿場口または須走口に下るコースが例示されている。「富士の裾野めぐり」は、東海道線御殿場駅から自動車で籠坂峠を越えて山中湖に至り富士五湖を巡るコース、中央線大月駅から電車または自動車吉田口に至り、富士五湖を巡るコースが紹介されている。なお、河口湖は東岸の船津から西岸の長浜までモーターボートが通っていた。また、西湖東岸から西岸根場間にもモーターボートの便があり、西湖から精進湖にかけては自動車の便があった。ところが、河口湖（長浜）から西湖東岸にかけては乗物の便がなく、富士五湖巡りの一部は徒歩を要したことがわかる。

〈表 10〉『日本案内記』「関東篇」にみる富士箱根国立公園関係の旅行日程案

<p><b>箱根温泉めぐり 二日間</b></p> <p>第一日 熱海行列車で出発、小田原から電車または自動車で諸温泉場、強羅遊園、大涌谷、芦ノ湖（湖尻箱根町間遊覧船）、箱根関址、箱根権現、千条ノ滝などを巡りて適當の温泉に宿泊。</p> <p>第二日目 宮ノ下から自動車で長尾峠の富士を見て御殿場に出るか、途中千石原から徒歩乙女峠の富士を見て御殿場に出て帰着。長尾峠、乙女峠、共に富士の全姿が見られる。</p>
<p><b>富士登山 二日間</b></p> <p>第一日 新宿発、甲府方面行夜行列車で出発。</p> <p>第二日 大月駅下車、自動車または富士山麓電車で富士吉田に至り登山、御殿場口、滝ヶ原、または須走に下り、自動車御殿場駅に至り東京行列車で帰着。</p>
<p><b>富士の裾野めぐり 三日間</b></p> <p>第一日 (一) 東海道線列車で御殿場駅下車、自動車須走を経、籠坂峠を越えて山中湖、富士浅間神社を見て、吉田口または河口湖畔の船津泊。(二) 中央線列車で大月駅下車、電車または自動車吉田口に至り、それより自動車山中湖畔に至り、引返して吉田口または船津泊。</p> <p>第二日 渡船にて河口湖横断、長浜より徒歩西湖畔に至り、渡船にて根場に至り、赤池を経て精進に至り、精進パノラマに登攀、精進泊。</p> <p>第三日 (一) 精進発本栖湖を見、割石峠を越えて三里ヶ原を経て富士人穴、白糸の滝、頼朝富士巻狩の址を訪ね、上井出より自動車大宮町に出で、富士身延の電車で富士駅に出で帰着。(二) 精進出発阿難坂、右左口峠を越えて右左口村に出で、そこから自動車甲府に出で帰着。</p>

## (6) 中部山岳国立公園

「中部篇」の「旅行日程案」を見ていきたい。モデルコースとして多様な28案が掲載されている。ここでは、北アルプス・南アルプスの登山や信越地方のスキーといったウィンタースポーツがモデルコースとして組まれているのが特徴である。このうち中部山岳国立公園のモデルコースを示すと〈表11〉のとおりである。

北アルプスでは、「上高地槍ヶ岳、燕岳縦走」、「白馬岳登山」、「立山登山アルプス横断」の三コースがあり、これに「黒部溪谷探勝」が加わっている。北アルプス方面への交通の概略は、「松本からは筑摩電気鉄道は西南に走りて島々に至り信濃鉄道は北を指して信濃大町に至り、大町からはまた大糸南線あり、神城まで通じ、日本北アルプス連峯への登山、風景の探勝者等皆これらの線によるのである」<sup>35)</sup>と記され、上高地、白馬岳方面には筑摩電気鉄道<sup>36)</sup>と信濃鉄道<sup>37)</sup>が通じていた。

「上高地槍ヶ岳、燕岳縦走」では、上高地が登山基地となり「上高地は日本北アルプス登山口の一で、焼岳、穂高岳は日帰り、槍ヶ岳は一泊行程、その槍ヶ岳から大天井、燕岳を経て中房温泉へ下る登山者が多い」<sup>38)</sup>と記されている。また、上高地への交通は、「松本駅から筑摩電鉄により終点島々駅下車、島々から上高地へは、徳本峠越えと、梓川沿ひの二途がある、島々から梓川に沿うて稲核、奈川渡、沢渡を経て中ノ湯まで三九軒三自動車の便があり、中ノ湯から上高地温泉まで徒歩僅に六軒、この他自動車が松本駅から直通して居るから容易に日帰りも出来る」<sup>39)</sup>と、中ノ湯から「僅に」徒歩6キロメートルで上高地に至ることが強調されている。なお、上高地河童橋までバスが開通したのは「中部篇」刊行2年後の昭和8年のことであった。<sup>40)</sup>昭和初年まで、上高地に行くには島々集落から徳本峠越えて6里の山道を歩かなければならなかった。<sup>41)</sup>

「白馬岳登山」では、「登山路は、大町からも築場からも、登山口四ッ谷まで自動車の便がある。(中略)四ッ谷は白馬登山の準備地で白馬館外二三の旅館があり、登山案内人組合もある」<sup>42)</sup>と記され、四ッ谷集落が白馬岳登山基地であったことがわかる。

「立山登山アルプス横断」では、「立山に短時日に登るには、富山方面からするが最も便利で、大部分の登山者は富山口に依つて居る」<sup>43)</sup>とあるように、富山駅が起点となっている。富山口については、「富山駅から市内電車または自動車以南富山駅に至り、其処から県営鉄道(電車)により終点千垣駅に下車する。千垣駅から立山(雄山)頂上まで約四〇軒である。駅から約二軒半で芦峠寺に達する。ここには雄山神社の摂社があり、登山案内人組合があつて、立山登山の準備地である」<sup>44)</sup>と、千垣駅<sup>45)</sup>から徒歩で芦峠寺<sup>46)</sup>に至る様子が記されている。芦峠寺から藤橋<sup>47)</sup>を経て立山登山基地の室堂<sup>48)</sup>までは、「芦峠寺から常願寺川右岸に沿うて約六軒で藤橋に達する。藤橋は常願寺川と称名川の合流点で旅館がある。此処からは右へ常願寺川に沿うて約一二軒で立山温泉に達する途と、左へ急坂を登り弥陀ヶ原を経て直接立山に登る途があり、その二途の追分となつて居る。また別に称名川に沿うて約八軒湖り、称名滝を探勝して弥陀ヶ原に出ることも出来る」<sup>49)</sup>とあり、藤橋から弥陀ヶ原高原<sup>50)</sup>を経て室堂に達して立山に登るのが一般的な経路であった。当時は千垣駅から徒歩で芦峠寺または藤橋まで行って一泊。翌日は、弥陀ヶ原高原等を登って室堂に宿泊。三日目によく立山頂上を極めるというコースである。

「黒部溪谷探勝」には、日本電力工事事用軌道<sup>51)</sup>が利用されていた。昭和6年当時の状況は、「宇奈月から上流黒部峡谷には黒薙、二見、錦繡、鐘釣、祖母谷、阿曾原、仙人、東谷の諸温泉があり、黒部探勝者の休泊所となつて居る。日本電力会社の軌道は今宇奈月から猫又迄約一四軒の間開通し、夏季は探勝者を便乗させて居るが、工事は尚進捗して小黒部付近まで延長の予定である」<sup>52)</sup>と、記されている。この軌道敷設のおかげで、黒部溪谷探勝は容易になったのである。

〈表 11〉『日本案内記』「中部篇」にみる中部山岳国立公園関係の旅行日程案

<p><b>北アルプス、上高地槍ヶ岳、燕岳縦走</b></p> <p>第一日 前夜新宿発篠井線松本駅下車、筑摩電鉄で島々に至るかまたは直接松本から自動車で梓川谷に沿ひ中ノ湯に至り、上高地まで約六軒徒歩、上高地温泉泊。</p> <p>第二日 梓川に沿うて槍沢を登り、頂上付近殺生小屋または肩の小屋泊、山に経験深き人は上高地から直接穂高岳に登り穂高小屋泊、または肩の小屋まで穂高縦走をするもよい。</p> <p>第三日 槍ヶ岳頂上を極め、東鎌尾根を下り、西岳小屋から大天井を経て燕岳小屋泊、または中房温泉に下り宿泊、この間常念岳登山をせんとすれば常念小屋一泊。</p> <p>第四日 中房温泉から中房川に沿うて有明温泉に至り、自動車で信濃鉄道有明駅に出で、松本で乗換帰京。このコースは逆コースを取るもの最も一般的である。</p>
<p><b>日本北アルプス、白馬岳登山</b></p> <p>第一日 前夜新宿発、松本駅で信濃鉄道に乗換信濃大町駅で大糸南線に乗換神城駅下車、または大町から直接自動車で四ツ谷を経て、二股下車、白馬大雪溪白馬尻小屋または頂上小屋泊。</p> <p>第二日 頂上を極め、白馬大池を見て引返し、鑓ヶ岳を経て鑓温泉泊。</p> <p>第三日 鑓温泉から南股雪溪を下り、二股から自動車で大町に出て松本乗換帰京。</p>
<p><b>北アルプス立山登山アルプス横断</b></p> <p>第一日 前夜上野発金沢行急行で富山駅下車、南富山から県営鉄道電車に依り千垣駅下車徒歩芦嶺寺または藤橋に至り宿泊。</p> <p>第二日 藤橋発材木坂から弥陀ヶ原高原を登り、立山室堂宿泊。</p> <p>第三日 立山頂上を極め浄土、竜王を経て五色ヶ原に至り宿泊、富山方面へ下山する人は直接浄土山から立山温泉へ下り宿泊。</p> <p>第四日 五色ヶ原発、黒部川平ノ小屋に下り、針ノ木谷を登り針ノ木峠小屋泊。</p> <p>第五日 針ノ木岳または蓮華岳に登り、針ノ木大雪溪を下り、大沢小屋を経て信濃大町駅に出て松本乗換帰京、同様逆コースをとるも可。</p>
<p><b>黒部溪谷探勝</b></p> <p>第一日 前夜上野発金沢行急行で北陸本線三日市駅乗換、黒部鉄道で宇奈月温泉着泊。または日本電力工事事用軌道で鐘釣温泉着泊。</p> <p>第二日 猿飛の奇勝を探り祖母谷温泉一泊、または宇奈月まで引返すことも出来る。</p> <p>第三日 中脊尾根を登り白馬頂上小屋、または鑓温泉に宿泊。</p> <p>第四日 四ツ谷に下り信濃鉄道に依り松本に出て帰京。別途猿飛から剣岳立山方面へ登山するもよい。</p>

### (7) 吉野熊野国立公園

「近畿篇」(上・下)の「旅行日程案」を見ていきたい。モデルコースとして上巻7案、下巻4案の計11案が掲載されている。下巻に収録された吉野熊野国立公園のモデルコースを示すと〈表12〉のとおりである。

モデルコースとして掲載されていないが、吉野山への交通は、「大軌電車は吉野川を渡ると、間もなく吉野神宮駅を過ぎて、漸く上り勾配を走り、終点吉野駅まで通じて居る。ここから吉野山駅まで架空索道の便がありこの駅から南方への平坦に近い道路の左右に蔵王堂、吉水神社、竹林院その他の社寺、史蹟があり、普通右の交通順路によつて見物する人が多い」<sup>53)</sup>と、大軌電車(大阪電気軌道)<sup>54)</sup>と架空索道<sup>55)</sup>を利用して吉野山に至ることが本文中に記されている。

「大峰山登山」は、大軌吉野線下市口駅から自動車で洞川まで行き徒歩で山上ヶ岳に至り宿坊に一泊。翌日は柏木へ下山して自動車で大和上市駅まで行くコースが紹介されている。大峰山については、「信仰登山者最も多く、夏季は白衣の行者山道に連り、頗る殷賑を極める。特に山上ヶ岳は『吉野の奥かけ』と称して年一万人以上の登山者を迎へ、京阪方面からの登山客に賑ふ」<sup>56)</sup>と、信仰登山者が多いことが指摘されている。また、三つの登路が、「登山路としては先ず大峯山脈へは大軌吉野線下市口駅から洞川を経て登るもの、同線大和上市駅から柏木を経て登るもの、吉野山を経て登るもの、以上三つの登路がある。(中略)洞川は大峯登山根拠地として数戸の旅館があり、また龍泉寺等何れも登山者の宿坊として登山期には頗る賑ふ」<sup>57)</sup>と紹介され、洞川が登山基地であったことが記されている。なお、吉野山を経て登る、古来「吉野奥掛」と称された登路については、「吉野山から金峯神社、新茶屋、百丁茶屋、五番関を経て洞辻茶屋に出て山上ヶ岳に達する登路は、往時吉野奥掛として最も多く登られて居た。吉野から約二四軒、一日行程であるが、最近では洞川や柏木方面へ自動車が通じたので、自然この登路によるものは少なくなつた」<sup>58)</sup>と、自動車交通の発達で衰退した旨が記されている。

「大台ヶ原登山」は、大和上市駅から自動車で柏木を経て入之波下車、徒歩で大台ヶ原山上へ至り大台教会に一泊。翌日は大台教会付近の名勝をまわって、入之波から自動車で大和上市駅に戻るコースが紹介されている。大台ヶ原については、「大台ヶ原の開山は明治四十年頃からのことで、ここに大台ヶ原教会の設立以来登山者を迎ふることとなつた」<sup>59)</sup>と、大台教会設立以降、週末旅行の客が激増したことが記されている。入之波から徒歩18キロメートルで大台教会に達した。教会については、「教会は神教で宏大な建築であるから、百数十人は宿泊が出来る。ここには気象観測所もあり、高山気象の観測が行はれ、電話等も設備されて、山頂とは思はれぬ便利さである」<sup>60)</sup>と、当時、宿泊拠点となっていたことが記述されており興味深い。「大峰山登山」「大台ヶ原山登山」は、いずれも一泊二日の行程であるが、「大峰山脈縦走及大台ヶ原山登山」は、六日間をかけて大普賢岳、行者還岳、弥山、仏経ヶ岳、仏生ヶ岳を縦走する登山コースである。

「南紀巡り」<sup>61)</sup>は、田辺を起点に、串本、潮岬、勝浦、那智滝、新宮、七里御浜、瀨、熊野本宮、湯峯温泉を巡るコースであり、今日の熊野巡り観光旅行の基本コースがすでにあらわれている。新宮、瀨、熊野本宮を結ぶものに水上交通が利用されており、「(瀨峡は)

新宮町の北約四〇軒、熊野川の一支流北山川の上流にあり、新宮からプロペラ船の便がある。新宮方面から瀨、本宮、湯峰方面に行くには、凡て皆このプロペラ船によるのである。(中略) 十津川と北山川の合流点たる宮井に於て、瀨から本宮へ、本宮から瀨へと乗換へることとなつて居る<sup>62)</sup>と、記されている。なお、プロペラ船の所要時間は、新宮・瀨間約3時間、新宮・本宮間約2時間40分、瀨・本宮間約2時間であった。

〈表 12〉『日本案内記』「近畿篇」にみる吉野熊野国立公園関係の旅行日程案

<p><b>大峰登山 二日間</b></p> <p>第一日 和歌山行列車で湊町駅発吉野口駅下車、大軌吉野線に乗換下市口駅下車または大阪上本町駅から大軌吉野線に依り下市口駅下車、下市口駅から自動車で洞川に至り徒歩山上ヶ岳宿坊泊。</p> <p>第二日 山上ヶ岳発柏木へ下山、柏木から自動車で大和上市駅から大軌電車により大阪帰着。</p> <p>この反対径路によるものもよく第一日例へば土曜日午後出発の場合は洞川或は柏木に一泊し登山の上帰阪出来る。</p>
<p><b>大台ヶ原山登山 二日間</b></p> <p>第一日 大軌吉野行電車で上本町駅発大和上市駅下車、自動車で柏木を経て入之波下車、徒歩大台ヶ原山上、大台教会泊。</p> <p>第二日 大台教会発付近名勝廻り、入之波に降り、自動車で大和上市駅から大軌鉄道で大阪帰着。</p>
<p><b>大峰山脈縦走及大台ヶ原山登山 六日間</b></p> <p>第一日 大軌吉野線により下市口駅下車、自動車で洞川まで行き、徒歩山上ヶ岳頂上、宿坊泊。</p> <p>第二日 大普賢岳、行者還岳を経て弥山小屋泊。</p> <p>第三日 弥山発仏経ヶ岳、仏生ヶ岳を経て前鬼宿坊泊。</p> <p>第四日 前鬼発、前鬼口に下り東熊野街道に依り(途中右代河合間自動車あり)河合泊。</p> <p>第五日 河合発大台ヶ原登山、山頂大台教会泊。</p> <p>第六日 大台教会発入之波に下山自動車で柏木を経て大和上市駅に到り大軌電車で大阪に帰着或は柏木泊翌日帰阪。</p>
<p><b>南紀巡り(田辺起点)三日間</b></p> <p>第一日 田辺—串本—潮岬—串本—勝浦</p> <p>第二日 勝浦—那智滝—新宮—七里御浜—新宮</p> <p>第三日 新宮—瀨—本宮—湯峯—田辺</p>

#### (8) 雲仙国立公園・阿蘇国立公園・霧島国立公園

「中国四国篇」には「旅行日程案」が記載されていないことは前述した。最後に「九州篇」の「旅行日程案」を見ていきたい。ここには、わずか二つのモデルコースを記載するに止まっている。門司起点の「一週間九州一周」と「二週間九州一周」である。雲仙・阿蘇・霧島の三国立公園は、いずれものモデルコースに含まれている。ちなみに、それぞれのモデルコースを示すと〈表 13〉のとおりである。二つのコースとも、九州の代表的な都市や観光地を一巡するという性格が強い。「一週間九州一周」では、三日目に雲仙国立公園、

四日目に阿蘇山、五日目に霧島国立公園に立ち寄るものの、それぞれの宿泊地への移動もあってあわただしい行程であった、と考えられる。「二週間九州一周」では、雲仙国立公園、霧島国立公園に宿泊する行程が組まれている。

〈表 13〉『日本案内記』九州篇にみる雲仙・阿蘇・霧島の三国立公園関係の旅行日程案

一週間九州一周(門司起点)	二週間九州一周(門司起点)
第一日 門司—福岡—大宰府—福岡	第一日 門司—福岡
第二日 福岡—唐津—長崎	第二日 福岡—大宰府—久留米—熊本
第三日 長崎—雲仙国立公園—島原—三角—熊本	第三日 熊本—阿蘇山—大分
第四日 熊本—阿蘇山—熊本—鹿児島	第四日 大分—日田—久留米—佐賀—唐津
第五日 鹿児島—霧島国立公園—青島—宮崎	第五日 唐津—佐世保—長崎
第六日 宮崎—別府	第六日 長崎—雲仙国立公園
第七日 別府—耶馬溪—門司	第七日 雲仙国立公園—島原—三角—八代—人吉
	第八日 人吉—八代—鹿児島
	第九日 鹿児島—指宿—鹿児島—霧島国立公園(霧島温泉)
	第十日 霧島国立公園—大淀—青島—鶴戸神宮—宮崎
	第十一日 宮崎—延岡—大分—別府
	第十二日 別府—宇佐—中津
	第十三日 中津—耶馬溪
	第十四日 耶馬溪—中津—門司

\*但し、ゴシック体は雲仙・阿蘇・霧島の三国立公園関連のもの

ここで、本文の記述を参考にそれぞれの国立公園の交通について見ていきたい。雲仙国立公園には、雲仙鉄道の雲仙小浜駅および島原鉄道の島原湊駅、さらに長崎の諫早からも自動車の便があった。「雲仙岳登山は最高峯普賢岳に登るので公園から高距七〇〇米、距離約六軒、二時間半行程で、登山は極めて平易である」<sup>63)</sup>と紹介され、登山には乗馬、駕籠の便もある、と記されている。

阿蘇山には、豊肥本線坊中駅から省線バスが出ていて、「登山路は数口あるが最も便利なのは豊肥本線坊中駅から省線連絡のバスが噴火口下の本堂まで一五軒の間通じて居り、約五十分で美しい裾野を迂回し乍ら展望を楽しみつつ登って仕舞ふので、阿蘇登山者の約九割はこのコースに依つて居る」<sup>64)</sup>と、裾野の展望を楽しみつつ登山する楽しみが記述されている。また、交通の便がよくなったことによる探勝客の増加を、「交通の至便は全くこの坊中登山口に登山者を集中して仕舞った。自動車道の開通後登山者は激増して以前は一年数万人に過ぎなかつたが、近年は二十万人に達すると云ふ」<sup>65)</sup>と、記している。

霧島国立公園における霧島登山は、「普通霧島登山は天孫降臨の霊域として知らるる高千穂峯に登るもので、その他霧島火山群中の最高峯韓国岳、または新燃山から高千穂峯への縦走などである」<sup>66)</sup>と記されるように、高千穂峯や韓国岳などに登ることが一般的であった。霧島温泉から高千穂峯へは約12キロメートルの4時間行程、韓国岳までは約8キロメートル



ルの2時間半ないし3時間行程であった。登山路としては、肥薩本線牧園駅から霧島温泉を経て登るもの、日豊本線霧島神宮駅から霧島神宮を経て登るもの、吉都線高原から登るものなど三つがあるが、霧島温泉を根拠地とするのが最も便利で、牧園駅から霧島神宮駅からも霧島温泉まで自動車です所要時間40分であった。「温泉（霧島温泉郷）を根拠地としての登山は興味が深い。既に国立公園として指定され、交通は至便で、登山路の設備もよく、比較的容易に登ることが出来る」<sup>67)</sup>と、その利便性が強調されている。

## まとめ

本稿の内容を整理すると、以下のとおりである。

国立公園法制定（昭和6年）に伴い、第三次にわたり12国立公園が指定（昭和9～11年）され、ほぼ同時期に、鉄道省『日本案内記』（全8巻、昭和4～11年）が刊行された。この旅行案内書には、戦前に指定された国立公園の特徴をはじめ観光利用に関する記述が少なからず見られる。

『日本案内記』に一項目を設けて国立公園の記述があるのは、同書発行以前にすでに指定されていた雲仙、霧島、阿寒、大雪山、阿蘇の5国立公園、および発行同時期指定の瀬戸内海国立公園の計6カ所である。また、同書発行後に指定された、十和田、日光（尾瀬を含む）、富士箱根、中部山岳、吉野熊野、大山の6国立公園においても、やがて国立公園に指定されるであろうということを眼中においた記述や、名勝地として極めて高い価値を有する地としての記述がなされている。

これらの12国立公園の記載項目を比較検討することにより、それぞれの国立公園の性格が浮かび上がってくる。まず、記述項目数の多い国立公園を挙げると、吉野熊野・富士箱根・日光の三国立公園である。この三国立公園に共通することは、東京・大阪の大都市に近く、観光地的性格を早い時期から備えたという点である。記載項目は、数の上では社寺・史蹟が最も多いが、山岳・温泉がこれに次ぐ。山岳は12国立公園すべてにおいて記載項目があり、温泉は大山・瀬戸内海を除いた10国立公園において記載項目が設けられている。すなわち、多少の例外はあるものの火山活動で生じた変化に富む景観が戦前に指定された国立公園の特徴になっている、と捉えることができる。

『日本案内記』には、中国四国篇を除いたすべての巻に「旅行日程案」が掲載されている。この旅行日程案は、国立公園への探勝旅客の誘致を目的として作成されたものと見てよいであろう。旅行日程案は、大まかなものから詳細なものまで、各篇によりばらつきがみられる。すなわち、「北海道篇」「九州篇」は、わずか二、三の周遊コースが組み立てられているに過ぎないのに対し、「東北篇」「関東篇」「中部篇」は、短期間の多様なモデルコースが組み立てられているという違いがある。これらの差異が生じた理由の一つは、首都圏・近畿圏からの旅行者を念頭においてモデルコースを組んだため、と考えられる。

この「旅行日程案」と、本文記載の交通等の記事から、昭和初期における国立公園地域の観光地としての状況と、当時の観光の在り方が浮かび上がってくる。それぞれの国立公園における交通・旅行日程関係を中心に記事の一端を抽出すると、次の通りである。

①阿寒国立公園：相生、阿寒湖畔間は夏季観光客多く、その間に遊覧バスが通ずる。

弟子屈から川湯温泉、和琴温泉を経て美幌峠の壮観を味ひ美幌に通ずる自動車道路も夏季観光客が多い。

②大雪山国立公園：北口は層雲峡温泉、西北口は松山温泉で、何れも大雪山登山に、西口は吹上温泉で、十勝及付近の登山に、南口は然別温泉で、然別湖遊覧に対するもの。

③十和田国立公園：東北本線古間木から十和田鉄道や乗合自動車を利用して奥入瀬川の溪谷を遡り、十和田湖畔の子ノ口に至り湖上遊覧を楽しみ湖畔に宿泊。

④日光国立公園：東照宮・二荒山神社・輪王寺・大猷院廟を参拝して、霧降滝を見学。翌日は中禅寺湖に遊び華厳滝を見て、戦場ヶ原を経て湯元温泉に宿泊。三日目に東京に戻る。

⑤富士箱根国立公園：小田原から電車または自動車で箱根に行き、強羅遊園、大涌谷、芦ノ湖、箱根関址、箱根権現、千条ノ滝などを巡り、箱根の温泉に一泊。翌日は長尾峠か乙女峠で富士山を仰ぎ見て帰京する。

⑥中部山岳国立公園：上高地は日本北アルプス登山口の一で、焼岳、穂高岳は日帰り、(中略)中ノ湯から上高地温泉まで徒歩僅に六軒、この他自動車が松本駅から直通して居るから容易に日帰りも出来る。

⑦吉野熊野国立公園(吉野山)昔ながら来る春毎に満山を粧ふ桜花と、幾多の南朝史蹟とは観光者を惹き付けて居る。(大台ヶ原)近年交通至便となり、京阪地方から週末旅行に適する。

⑧雲仙国立公園：雲仙岳登山は最高峯普賢岳に登るので公園から高距七〇〇米、距離約六軒、二時間半の行程で、登山は極めて平易である。

⑨阿蘇国立公園：豊肥本線坊中駅から省線連絡バスが噴火口下の本堂まで一五軒の間通じて居り、約五十分で美しい裾野を迂回し乍ら展望を楽しみつつ登って仕舞ふ。(中略)自動車道の開通後登山者は激増して以前は一年数万人に過ぎなかつたが、近年は二十万人に達すると云ふ。

⑩霧島国立公園：温泉(霧島温泉郷)を根拠地としての登山は興味が深い。既に国立公園として指定され、交通は至便で、登山路の設備もよく、比較的容易に登ることが出来る。

以上の記述は、国立公園の巡り方はもとより、交通状況の利便性を強調するものが目につく。すなわち、鉄道や自動車利用の交通網の発達、民衆の観光旅行の隆盛を促していたことを、一連の記述内容から読み取ることができる。と同時に、大正期に流行した山河を巡る旅は、昭和期に入ると国立公園を対象とする自然を巡る観光旅行に展開を見せたことをうかがい知ることができるのである。

その詳細については、今後の課題として、『日本案内記』各項目における記述内容の分析を通して明らかにしたい、と考えている。

## 謝辞

本稿は、愛知淑徳大学研究助成「景観を中心とする観光資源に関する基礎的研究」(平成

24～25 年度) の研究成果である。助成金を活用して、調査研究の一環として本稿で取り上げた国立公園の景観を実際に見学できたのは、得難い経験であった。記して、研究費をいただいた大学当局に感謝申し上げる。

## 注

- 1) 鉄道省『日本案内記近畿篇下』昭和 8 年、p 340。「この山岳景観は最も著名であり、この山地に源を發する熊野川の下流、瀨八丁や紀州の海岸美の地域一帯は、既に国立公園として指定されている」の記述が見られる。国立公園法制定(昭和 6 年 4 月)に伴い吉野熊野国立公園は第 3 次指定(昭和 11 年 2 月)となるが、初版本にこの記述がある。昭和 7 年 10 月、吉野熊野を含む候補地 12 ヶ所が決定したため、このような記述となったのであろうか。
- 2) 鉄道省『日本案内記北海道篇』昭和 11 年、p 63
- 3) 前掲 2)、p 63
- 4) 前掲 2)、p 63
- 5) 鉄道省『日本案内記中国四国篇』昭和 9 年、p 79
- 6) 鉄道省『日本案内記九州篇』昭和 10 年、p 60～61
- 7) 前掲 6)、p 60
- 8) 前掲 6)、p 61
- 9) 前掲 2)、p 278
- 10) 前掲 2)、p 218
- 11) 前掲 6)、p 169
- 12) 前掲 6)、p 255
- 13) 前掲 6)、p 255
- 14) 中川浩一『旅の文化誌』、伝統と現代社、昭和 54 年、p 198～200
- 15) 前掲 1)、p 330
- 16) 前掲 1)、p 342。吉野熊野国立公園の指定は昭和 11 年 2 月であるものの、すでにこのような記述が見られることを前述した。
- 17) 鉄道省、『日本案内記関東篇』昭和 5 年、p 55
- 18) 鉄道省は『鉄道旅行案内』(大正 3 年)発行以降、『神まうで』(大正 8 年)、『温泉案内』(大正 9 年)、『お寺まあり』(大正 11 年)、『日本北アルプス登山案内』(大正 13 年)、『スキーとスケート』(大正 13 年)と、続々と旅行案内書を刊行した。
- 19) 前掲 2)、p 70～71
- 20) 前掲 2)、p 278
- 21) 前掲 2)、p 218
- 22) 前掲 2)、p 222
- 23) 前掲 2)、p 224
- 24) 鉄道省『日本案内記東北篇』昭和 4 年、p 175
- 25) 前掲 24)、p 187
- 26) 前掲 24)、p 48
- 27) 明治 41 年に日光電気軌道株式会社設立。大正 2 年に日光停車場・馬返間開通。
- 28) 前掲 17)、p 61
- 29) 上州と下野の国境にある金精峠越えの峠道は明治初年に開鑿された。昭和 40 年に金精道路(当初は有料道路、現在無料)として整備以降、菅沼・丸沼方面への観光旅行が容易になった。
- 30) 前掲 17)、p 398
- 31) 前掲 17)、p 401
- 32) 前掲 17)、p 198～199
- 33) 明治 21 年設立の小田原馬車鉄道は、明治 29 年に小田原電気鉄道に社名変更。昭和 3 年に箱根登山鉄道株式会社となった。
- 34) 前掲 17)、p 199
- 35) 鉄道省『日本案内記中部篇』昭和 6 年、p 244
- 36) 筑摩電気鉄道は、大正 9 年に筑摩鉄道として設立。大正 11 年に松本・島々間が全通。
- 37) 信濃鉄道は大正 2 年に工事を着手した鉄道で、昭和 12 年に国有化され鉄道省大糸南線に編入された。
- 38) 前掲 35)、p 247
- 39) 前掲 35)、p 248
- 40) 昭和 3 年、「梓川電気」(のちに東京電力に合併)が梓川沿いに「大正池発電計画」の工事用の車道工事に着手。昭和 8 年、難工事の末に釜トンネルが開通してバスが河童橋まで乗り入れることとなった。
- 41) たとえば、「日本新八景」溪谷の部門第一位に入選した上高地を昭和 2 年に取材旅行した吉田絃二郎

は「徳本峠越え」ルートで上高地入りをしている。

42) 前掲 35)、p 267~268

43) 前掲 35)、p 355

44) 前掲 35)、p 355

45) 千垣駅は、大正 12 年に富山県営鉄道（現、富山地方鉄道）の終着駅として開業した。その後、栗巣野駅（昭和 12 年開業、現在廃止）を経て立山駅（昭和 29 年開業）まで路線が延長。

46) 芦峯寺は、江戸時代から立山信仰の拠点として栄え、今も立山山岳ガイドの住む集落である。

47) 藤橋は、立山駅のある場所。立山ケーブルカー（昭和 29 年開業）の起点となる。

48) 室堂は立山登山の拠点で、古くは修験者が籠るお堂であったと言われ、享保 11 年（1726）再建と伝える歴史的建造物（国の重要文化財）が保存されている。

49) 前掲 35)、p 355

50) 立山ケーブルカー開業後、弥陀ヶ原高原を経て室堂に至る道路が整備され、やがて室堂に至るバス路線が整えられた（昭和 39 年）。

51) 黒部峡谷鉄道の前身である日本電力工専用軌道は、昭和 2 年に黒部川沿いの電源開発を目的に日本電力が宇奈月駅～猫又駅間を開通させた鉄道である。猫又から鐘釣を経て小屋平に路線が延び（昭和 4 年）、昭和 12 年には終点の樺平駅まで開通した。当初は、建築資材や作業員輸送が目的であったが、登山者や観光客を便乗させていた。正式な鉄道路線として営業開始したのは、戦後の昭和 28 年のことである。

52) 前掲 35)、p 362

53) 前掲 1)、p 329

54) 昭和 3 年、大阪電気軌道吉野駅開業。

55) 昭和 4 年、吉野山～千本口間開業。吉野ロープウェイ（吉野山旅客索道）は現存する日本最古の索道路線として知られる。

56) 前掲 1)、p 342

57) 前掲 1)、p 343

58) 前掲 1)、p 343

59) 前掲 1)、p 342

60) 前掲 1)、p 345

61) 「南紀巡り」には次の補足がある。「大阪市内から田辺までは南海または阪和の電車と紀勢西線の列車とを利用すれば三時間余で達せられる、途中の和歌浦、紀三井寺、道成寺などはよく知られた名所である。田辺の南一〇軒には白浜、湯崎の温泉場がありここに一浴して熊野路の旅の一夜を楽しむのもよい」

62) 前掲 1)、p 416

63) 前掲 6)、p 171~172

64) 前掲 6)、p 257

65) 前掲 6)、p 257

66) 前掲 6)、p 323

67) 前掲 6)、p 322